オーシル・カンスタ・ヨンセン

原作者オーシルさんが語る『キュッパのはくぶつかん』

聞き手：稲庭 彩和子

2014年5月5日 ／ 東京都美術館 講堂

稲庭　東京都美術館で学芸員をしております、稲庭です。よろしくお願いします。2012年に、福音館書店さんが『キュッパのはくぶつかん』を出版された時に、書評でこの本のことを知り、「これは面白そうだな」と思って早速購入してみました。この本は、丸太の男の子のキュッパが、博物館ごっこのようなことをするストーリーです。キュッパは最初に森に出かけていって、いろいろなものを拾って集めて、それをどんな風に並べようかなとか、どんな風に他の人に伝えようかなと自分で考えて、博物館をつくることになります。そのあとすごくユニークな展開をしていくのですが、そんな、博物館のお話です。

この本を読んだときに、人間が「もの」に出会ったときの最初のワクワク感みたいなものがとてもよく伝わってくる本だなと驚きました。子供がキュッパのようにお散歩にでかけて、松ぼっくりとか、道端に落ちているような何気ないものをポケットにいっぱい詰めて家に帰ってきて、「お土産にとってきたよ」と満足そうに見せてくれることってあると思うんですが、そういう、何気ないものをじっくり見つめて、これとこれは違うとか、違いを考えながら拾ってくる、そしてそれを誰かに見せて喜びを感じた経験というのは、皆さん原体験としてお持ちなのではないかなと思います。そういった経験とミュージアムとが、実は底のところで繋がっている、そのことをもう一度思い出させてくれる本だと思いました。今日は、オーシル・カンスタ・ヨンセンさんに、この本を書かれた背景や、どういう気持ちでこの物語が生まれてきたのかということをぜひ伺いたいと思って、来ていただくことになりました。

まずは『キュッパのはくぶつかん』の朗読を聞いていただいて、この絵本の内容をご紹介してからオーシルさんにお話しをしていただこうと思います。

朗読

―引用『キュッパのはくぶつかん』(2012年 福音館書店発行)より

『キュッパのはくぶつかん』
オーシル・カンスタ・ヨンセン　さく
ひだに　れいこ　やく

キュッパは　まるたの　おとこのこです。
もりの　ちいさな　きの　いえで　くらしています。
キュッパには　ともだちが　たくさん　います。
なかでも　モミのきの　ググランとは　だいの　なかよしです。

まちには　キュッパの　だいすきな　おばあちゃんが　すんでいます。

きょうは　かようび。もりへ　さんぽに　いく　ひです。

「ようし。きょうも　おもしろいものを　いっぱい　あつめるぞ」

キュッパは　わくわくしながら、
もりに　おちているものを　つぎつぎに　ひろいます。

「さあて、これで　よし」

キュッパは　いえに　かえると、ひろってきたものを　ぜんぶ　ゆかに　ひろげてみました。
・・・・・・・・・・（略、当日は全文を朗読した）

キュッパの源流―私の育ったまち

こんにちは。今日はたくさんの人に来ていただけて本当にうれしいです。オーシル・カンスタ・ヨンセンと申します。いまのところ、イラストレーターで、デザイナーで、アーティストで、子供の本の作家、と名乗っています。私はノルウェーのベルゲンというまちの出身です。ベルゲンは1070年につくられた、ノルウェー第2の都市です。国の西側に位置していて、海と7つの山に囲まれていて、人口は約27万人。ノルウェー全体の人口も500万人ですから、それほど人口が多いわけではないんです。ベルゲンは、中世に貿易商人たちが結んだハンザ同盟の加盟都市で、昔から様々な国との貿易が盛んに行われていたので、ヨーロッパの他の国々の影響をかなり受けています。だからこそノルウェーの他の地域の人々は、ベルゲンそのものがひとつの国のようなもので、ベルゲンの人はほとんどノルウェー人ではないと言います。ベルゲンの人々は非常に騒々しくて、しょっちゅう自慢話しをするともいわれます。

たくさんの小さな木造住宅が並んでいますが、建物の間の道はとても幅が狭いです。この小さな路地をみなさんにも歩いてみてほしいと思います。本当にわくわくしますよ。私自身も、この狭い路地を山の方に向かって登っていくのが大好きなんです。坂がとても急なところがあって、歩いていてとても気持ちがいいんです。これもベルゲンによく見られる風景です。オレンジ色の灯りが山に向かって上がっているのがわかりますか？これがフロイエン山です。ここまでくるとまち全体を展望することができますし、冬にはこの狭い路地もソリですべることができます。とてもわくわくします。これはベルゲンのクリスマスの頃の写真です。背景に見えるのが、ウルリケン山。とても大きくて、特徴的なかたちをした山です。何度もこの山の絵を描きました。私が子供の頃から親しんでいる山です。

さて、私の家の近くにせまってきました。子供時代を過ごした家がすぐ近くにあります。ウルリケン山を背景に、私が近所で写した写真です。左から二つ目の黄色い家が両親の家です。斜面が本当に急で、坂になっているのがわかるでしょうか。この家は1882年に建てられました。この家自体が博物館みたいなものですね。この通りに建った最初の家なのですが、残念ながら家の装飾は1960年代に取り払われてしまいました。それでも、とても素敵だと思います。家の前の木は南洋杉ですが、ノルウェー語では「猿もひるむ」という意味になります。ベルゲンにも何本かありますが割と珍しい木のようです。これが入り口。中に入ってみましょう。この階段が大好きなんです。子供の頃よく滑って降りました。私は、ちゃんと足で歩いて降りるということをほとんどしませんでした。いつも滑って降りたり、よじ登ったりしていました。こちらは母の写真です。台所にいるところです。母は料理好きで、台所で過ごす時間が好きなんです。ニコニコしているでしょ？母のうしろにはスパイスが並んでいます。それから料理の本も棚に並んでいます。母はキュッパのようにいろいろと物を集めるのが好きな人なんです。これがベランダ。妹の誕生日を友達と祝っているところです。世界で一番眺めの良いベランダだと思います。夏の間は両親がベランダで寝たりします。これもとてもいい習慣じゃないかなと思っています。こちらは屋根裏部屋です。子供の頃はよくここで友達と隠れんぼをして遊びました。本当に魔法のような時間でした。育ったこの家の一番気にいっているところは、本当に不思議な部屋がたくさんあること、そしてとても変わったかたちのお部屋がたくさんあったことです。隠し部屋があって、戸棚も気にいっていました。今では規格化された家ばかりですよね。規格化された家というのは本当につまらないと思います。私は風変わりな家が好きなんです。

では、もうすこし家族を紹介したいと思います。これは私の母です。クリステンといいます。彼女は幼稚園の園長です。母のおかげでたくさんの良い絵本に出会うことができました。これはベルゲンではなく、ノルウェーの北部です。母の両親はノルウェーの北部出身で、母も9歳まで住んでいましたが、そのあとにオスロに引っ越しました。オスロはノルウェーの東部にあたります。そのあとシーエンに引っ越しました。作家のイプセンの出身地ですね。ただ、イプセンはシーエンを嫌いだったんだそうです。

私の母は、北部を懐かしむときがありますが、引っ越しをしてくれたおかげで私の父と出会ってくれたので、やはり引っ越してくれてよかったなと思います。この写真は祖母が育ったトラーナという島から撮った写真です。これは母です。魚をさばいているところです。母はトラーナで貝を集めています。さきほども申し上げたように、私たちの家族の中で、コレクター役は母になります。これは父です。オーゴンといいます。この写真はちょうど美術大学に入学する頃だと思います。私も同じ学校に入って卒業しました。これは 1975年、76年ごろでしょうか。グラフィックスとイラストを学んでいたそうです。父はグラフィックデザイナーとしての仕事をデザイン事務所でしていましたが、数年前に辞めて、なんと絵画にうつりました。非常に面白くて、私を助けてくれる良い父です。彼はキュッパの友達、ググランですね。母がどちらかというとキュッパ。私はググランとキュッパの間をとったようなキャラクターでしょうか。これは妹のマリです。彼女もイラストレーターなんですけれども、私と同じように美大を出ています。彼女も子供の本の作家をしています。同じ遺伝子ですから。彼女は本当に優秀なんです。

私は子供時代、いわゆるコミューンでいろいろな家族と一緒に住んでいました。キッチンやリビング、バスルームは共有です。この家に住んでいた方々はジャーナリストや医師、医学療法師、アーティスト、そして母のように幼稚園で保母をしている方などがいました。人格形成にはいろいろな影響を受けたと思います。大人からもたくさんのサポートがありました。17歳になった頃、この家を分割して、コミューンではなくそれぞれの家族のスペースにしたのですが、みんなまだここに暮らし続けていますし、とてもよい関係性の中にいます。これはこの共同体で過ごしていた家族の子供たちです。私の表情を見ると、どうも悪だくみをしているように見えますね。これも私です。私がいつも木登りばかりしていたもので、共同体の大人の方が、そこから降ろしてくれたところですね。いっておきますが私は一人で木に登ることができるので助けは必要なかったのですが、抱っこしてぐるぐる回してくれることがとっても面白くて好きだったんです。これは父方の祖母、祖父、そして父です。山岳地帯にある山小屋への旅行の時の写真だと思います。山小屋で過ごすというのは、ノルウェーの典型的な余暇の過ごし方です。

こちらはシーエンにある、母方の祖父母の家ですね。この地域というのはいかにもキュッパ感があるなと私は感じていました。このランプは祖父が子供の頃、雑誌でつくり方を見て、自分で絵をつけてつくったランプです。

私は、子供の頃はとても活発な子でした。本当にすごく活発で、エネルギーに溢れていたようです。大きくなるとずいぶん怠け者になったんですけれども、それまでは本当に活発でした。スキーが大好きでした。劇団にも入っていたんですが、これは座っている白雪姫を見つめているところです。この白雪姫役の子が着ている美しいシルクのドレスに魅了されていたんですね。こういう、ディテールに集中してしまって本来の劇に集中しないタイプの子でした。これも私です。学校の音楽バンドに参加していました。10年くらいやりましたね。最初3年間はコルネット、それから5年間はクラリネット。そして最後の2年間

はバリトンサックスを演奏していました。今度出版するキュッパの2作目では、キュッパも学校の音楽部に入ることになります。そこには私自身の体験も少し反映されています。ストーリーはもちろん変えていますよ。キュッパは楽譜をなかなか読めなくって暗譜ができないんですね。私にはそんな問題はありませんでしたが、即興で演奏するというのは苦手でした。しかしこの二作目では、キュッパは即興が好きなのです。私はキュッパを通じて自分とは少し違う人生を生きることができます。

私は活発で我慢強くありませんでした。ただ、やはり漫画を読んだり、絵本を読んだりすることは大好きでした。どちらかというとのんびりした家族で、みんなで森にでかけるなんてことは、頻繁にはしていませんでした。それでもたまにリュックを背負って森に出かけることがありました。私はおそらく、当時はあまり森に行くことが好きじゃなかったんですね。どこか行くぞと言われれるたびに、森に行くよ、山に登るよと言われるたびに、機嫌を悪くして不満ばかり言っていたんです。自分がやりたいことを邪魔されるのが嫌だったんです。でも結局、最後には楽しいといつも思いました。これは妹と二人で森に行っていろんなものを集めた時の写真です。植物などをたくさん拾って、貼り付けました。でも、最後までやり通すことはできませんでした。私にとって博物館づくりに一番近かったのは、これだったのではないかなと思います。

手を通して生まれるアイデア―キュッパはどうやってできたのか

さて、どうやって絵本作家になったのかという話です。またどうやって博物館をつくる物語を思いついたのか。実は、それはとても自然な流れの中で生まれてきたもので、計画してできたものではありませんでした。いろいろなものが繋がったのです。2008年にベルゲン・アートアカデミーを卒業したあと、ビジュアル・コミュニケーションとグラフィック・デザインを学びました。でも、当時は何をしたらいいのか分かりませんでした。イラストは描けましたし、新聞や雑誌向けに描いたりもしましたが、子供の本をつくるということは、思いつきもしませんでした。当時はつまらないミーティングにたくさん出席していましたので、紙に小さないたずら描きをよくしていました。絵を描くときは特に何も考えません。ペンが考えてくれて自由に動いてくれるんです。私はかたちや線をたどるだけです。例えばものを見て、その線をたどっていくわけです。それを紙の上におとしていくのですが、まるで瞑想しているような感じです。

私は森が好きですが、少し怖いなと思っています。森は神秘的でミステリーに満ちています。なので、距離をおいて森を見るようにしています。例えば写真を見て、そこから絵を描いたりします。でも時々ちょっとだけ出かけてみて、よく観察するようにもしています。そうすると小さな世界が見えてくるんです。そこに小さな人たちや生きものが生きていて、ミニチュアの世界があると想像します。自然はいろいろと

想像の余地を与えてくれると思います。私はせっかちなので、勉強したり調べたりすることを、ずっと長くはやっていられないのですけれども、だからこそ、ものをつくる辛抱強い人たちは素晴らしいなと思っていました。きちんと細工をするということは、準備をたくさんしなければなりませんから。私はそういった細やかな作品をつくることはできませんが、つくっている人たちや、彼らが使っている道具たちを絵に描くことはできます。細かいディテールが好きなんです。これはほんとにまるで、ジュエリーのよう。みんな完璧なかたちをしています。それから植物園が本当に大好きです。特にこういう風に名前をかいた札が立っているもの。とても好きです。緑とそれから白のコントラスト。本当に綺麗に並んでいます。

2008年の夏に、オスロにいる妹を訪ねました。オスロからベルゲンに戻る途中、電車の窓から外を見ていました。森を眺めていたんです。ノルウェーの東部のほうなのですが、森は本当に暗くて、何か張り詰めたような、神秘的なものに見えました。いかにも典型的なノルウェーの森だなとおもって、私はそれを紙に描いてみたいと思い、スケッチブックに描きはじめました。ノルウェーの森の中には、本当にいろいろなものが想像されます。トロルのようなものもいるんじゃないかと想像してしまいます。しばらく眺めていると木に目が見えてきました。そして、その木に足をつけてみることにしました。動き回る木を想像しはじめたんです。そうしてしばらくすると、森が本当に生きもののようになっていきました。そのイラストがひとつのきっかけとなったんです。私は家に帰り着くと、描いた絵をスキャンして、デジタルで色をつけはじめました。これが結果的には初めて描いたキュッパの世界となりました。この世界はとても素敵で、飛び込みたいと思いました。それから、木や森を描き続けました。ずっと長いこと描き続けました。でもまだこの段階では、それを絵本にしようとは思っていませんでした。私は木を描きつづけました。少しキュッパらしいキャラクターが見えてきたと思います。これですね。これがたぶんキュッパの最初のバージョンではないかと思います。これを描いたあと、友人たちにもこれは面白いんじゃないか、このキャラクターいいんじゃないかと言われたこともあり、私もいいなと思ったので、この男の子の絵をたくさん描きました。そしてキュッパが生まれたんです。

最初は木のキャラクターらしい名前でウッディと呼んでいました。ところが父が「これは丸太の子でしょ」といいました。ノルウェー語では丸太をKUBBE(発音はクッベ)といいます。だったらやはりKUBBEと呼ばなければだめだよ、ということで名前はKUBBEに決まりました(日本で翻訳本が出版されるにあたり、日本語での呼称はキュッパとなった)。

これは今のキュッパです。これはノルウェーで出した4冊目のキュッパの本で「すべてのもののアルバム」というタイトルになっています。ここには「これが自分、キュッパ」と書いてあります。その次の見出しは「なくてはこまるもの」です。このように、たくさんのものを整理して並べるということに、私は魅了されます。のめり込んでしまうんです。まるで子供の頃、博物館にいった時のことを思い出します。きちんと何かの規則に従っていろいろなものが並んでいる。みんな秩序だって並んでいるんです。その中に入ると全く

別世界に入ったような気がします。私はどちらかというと、目を通して見えたもの、それから手で触ったものを通していろいろなものを理解するタイプの人間です。ですから、博物館に行くということはいろいろな意味をもってきます。ガラスケース、高い天井、カーテン、それから臭いも。みんなまるで演劇の世界のようです。子供の目にはそれがどんなに魔法のように見えるのかということを、私たちは忘れてしまいがちです。私も子供の頃よく博物館に行きました。自然博物館とか、剥製の博物館とか。とってもかっこよくて、ちょっと怖いけど楽しくてエキサイティングでした。この2ページ目を広げてみていただきますと、まるで博物館の展示のようだと思われないでしょうか。ひとつひとつKUBBEを展示していくんです。

絵を描くときには私はリズムにのって描いています。KUBBEとKUBBEとの間にちょっとだけ白いスペースがあればいいんです。あまり多くてはいけないんです。どれくらいだと大きなスペースになりすぎるのか、それはよくわかりませんが、感覚で、リズムにのって描いていきます。これはまるで博物館に展示品を並べるときのようですよね。KUBBEを並べて展示していきます。

こちらは、「なくてはこまるもの」を並べたものです。キュッパが生きていくためにどうしても必要だと思うものが集められていて、それを分類しているんです。とても楽しいですね。こんな世界の中でも、その混乱にのまれないでいる方法だと思います。誰しも、何かしらそういう方法を持っていると思います。でも当時、あの博物館の本を描いたときにはそう思っていたわけではありませんでした。なんとなく次々に繋がっていって物語が生まれたんです。

では、どうやってこの博物館をつくるという物語が生まれたのかですが、私はイラストを通じてはあまり考えませんでした。このキュッパというキャラクターをつくりあげ、そして私自身が彼に関心を持って好奇心を持っていた。そこでキュッパを主役にしたショートストーリーをつくりはじめたんですね。ちょっとスケッチをしたり遊びで書いてみたり。そうやって遊んでみるなかで、キュッパに黄色い長靴をはかせてみたり、赤いスカーフを巻いてバスケットを持たせてみたりしました。そしてこう想像してみたんです。家の外に出ていく、季節は秋。落ち葉がたっくさんある。その葉っぱがたくさん落ちている中で、ググランが箒をもって掃いているんですね。やっと終わりそうだ、というところに、キュッパは落ち葉の山を見て突っ込んでしまう。ググランは「またやらなきゃいけないのか」とため息。こんな感じです。

私がストーリーをつくるときには、まったく計画がないんですね。ひとつの風景からその次のシーンと、場面場面ごとに移り変わっていきます。アイデアもイラストを描いているうちに出てくるんです。たとえばこうです。この落ち葉の山にキュッパは飛び込むわけですけど、バスケットはどこにいったかというと、当然秋ですから、地上に落ちたものをいろいろ拾ってバスケットに入れていくわけですね。イラストを描きながら、キュッパはいろいろ集めるんだ、土の上に落ちたものを拾い集めるんだ、彼は収集家、コレクターなんだと、こういう風に思いはじめるんです。手は描きつづけているので、手がかわりに代弁して

くれているような感じでしょうか。キュッパはいろんなものをとにかく収集するのが好きなコレクターなんだと。こういったことが見えてきたときに、私はふと、子供の頃のひとつの感覚、喜びみたいなものを思い出したんです。自分が子供のときに、ものを手に拾ってみたときの感じ、手にもった瞬間の感触、そしてそれを自分のポケットにしのばせてみたときの気持ちを。ああ、そういえば私、子供のときに博物館をつくりたいと思ったことがあった、でもどうやってつくっていいかわからないから、やったことがなかった。ただ、大人になった今や自分はそれをイラストにすることはできる。物語にすることはできる。博物館をつくっている誰かを描くことはできる、と思ったわけです。それから、キュッパはいろいろなものを持っていますね。だから博物館があってもいいじゃないかと考えました。その博物館というアイデアはこのように有機的に生まれたんです。自分の手と、紙を通して生まれたアイデアだったんです。

自分流のロジックで組み立てる

それから、この『キュッパのはくぶつかん』が仕上がったあと、うん、これだったら私にもできるかな、現実にやってみようかしらと思いまして、私自身も博物館をつくってみることにしました。森から、自分の住むまちの道からいろんなものを拾ってきてそれを分類してみようと思ったんです。これは私のリビングルームなんですけれども、私の仕事場を兼ねています。私はフリーランスで仕事をしているので、ここで作業をしているんですね。そして、これが私の「ネイチャー（自然）・コレクション」です。なかなかかっこいいと思いませんか？本当に素敵だなと自分でも楽しんでコレクションをつくっています。没頭することによってリラックスできるんです。頭の中でも考えたりできるんですね。

分類は自分なりの方法でやっています。自分の方法があるんですね。類型などテーマをつくって決めて、そこからカテゴリーごとの分類をはじめます。これは「ストリート・コレクション」と呼んでいるもので、自分の家の近所に落ちていたゴミのコレクションです。ちゃんと手袋をつけて拾ったものですよ。ちゃんと洗って、そして乾燥させます。そしてこの箱の中を白く塗って、そこにひとつひとつのゴミをノリでくっつけていくんです。そのときには、何らかの系統立てをします。今回は色で分類しました。

私はいくつかの小学校で、6歳から9歳の子供たちを対象に読み聞かせなどをしていたんですが、そのときにコレクションのプレゼンテーションをしました。なぜ、どうやってコレクションをするのかという話です。コレクションの仕方や、どういうものをコレクションすべきかという答えは出しませんが、私なりに、こういうコレクションがあるんだよと紹介するんです。そして子供たちもこれをつくりました。そして彼らにこう言います。これは実際に道端に落ちていたゴミなんだよ。ひとつひとつは決して見栄えのするものではないよね。でも、全部一緒になると、きれいで面白くない？って。子供たちはうなずいてくれます。ゴミに価値を見出すんです。そして子供たちもこのアイデアを分かってくれるんですね。ああそうだ、って。

私はいろんなやり方でコレクションをします。写真を撮影してファイルに入れることもします。写真は本当にたくさんあります。写真をインスピレーションや参考資料としても使っています。緑のものは特に収集していますね。本当に大好きなんです。そしてこういうふうに絵に描き起こしています。これはコレクションの方法の一例です。

これは2日前の上野公園です。国立科学博物館の外でこの袋にいろんなものを入れていきました。本当に気持ちよかったです。こうして地べたにすわって、土の近くにいって、どんどん近くで観察していくと、いろいろな面白いものが見えてきます。細部が浮き彫りになってくるんですね。ミニチュアの世界です。葉っぱが小さな木になって、石が山のように見えてくるんです。面白いなと思うものをどんどん袋に入れていきます。実はあんまり考えないんですね。素早くぱっぱっぱっと、自分がいいなと思うものを袋に入れていきます。一方で、頭の中では上野のコレクションをつくろうと思い始めています。これは東京都美術館に到着してから、机を作業台にして、分類を行ってるところです。ここでもまた、あまり考えないようにしています。自分が何をしているのか分析をしたりはしません。自分の確信できる直感に従って、置いていくんですね。そこから何らかのパターンが出てくるんですけれども、リズムと空間というものを意識して置いていきます。グラフィックデザイン的な発想ですね。テキストと写真と画像を本にまとめていく、雑誌にまとめていくのと同じような作業だと思うので、グラフィックデザインを学ぶ学生は、たまにこういうことをやるといいと思います。

石はひとつのグループにまとめます。こんな感じです。そして石の横には、枝を置きます。そして枝と石の間に木片みたいなものを置くんですね。これは本当は木の一部なんですが、石にも見えるので、石と枝の間に置きます。木からきているものだけれど石に見えるので、その間に置くんです。ある意味そこがこのコレクションのつなぎ目になるわけですね。

やってる間はそのように意図的にやっているわけではないんですけれども、作業をしている間に手が導かれていきます。ここは枝から葉っぱです。ここの枝と葉っぱの間に、実際に枝に葉っぱがまだついているものを置きます。これもまたひとつ、コレクションの繋ぎ目になるわけです。私の頭の中ではこれが私流のロジックなんです。オーシル・カンスタ・ヨンセン流のロジックなので、みなさんも同じようにやる必要なんて全くありません。みなさん自身が、こういうかたちでコレクションづくりをしたい、作品づくりをしたい、という方法を見つけてほしいと思います。これが現在のところの「上野コレクション」になりました。タイトルは『上野 in a bag（袋の中の上野）』です。

質問1 キュッパの本の中で、キュッパがもともと持っている「集める」という情熱のようなものを、みんなと分かち合うために、具体的なアイデアやヒントを与えてくれるおばあちゃんの存在がすごく大事だと思いました。おばあちゃんは答えを教えるのではなく、キュッパが考えるためのヒントや知恵を与えてくれました。あのおばあちゃんのキャラクターをつくる上で、ヒントになった実在の人物がいれば教えてください。

ヨンセン そうですね。このおばあちゃんは、やはり描いているうちに生まれました。キュッパには両親はいなかったので、おばあちゃんはいるだろうと思ったんです。年をとった人たちは長く生きているのでたくさんの知識をもっています。おばあちゃんだったらきっと何でも知ってるだろうと思ったんです。でもおばあちゃんは考えを押し付けるのではなく、キュッパにいろいろ自分で気付かせてあげる、そういう人物です。おばあちゃんはちょっとヒントを与えるだけなんです。

質問2 今見せてもらった映像は、あたたかい、春とか夏の感じがするのですけれども、ノルウェーは冬がとても長く、雪の世界というイメージがあります。雪の中でも遊びとかコレクションをよくされていましたか？

ヨンセン たとえば雪の写真を撮るということはありましたね。でも、私の育ったところはノルウェーの西部なので、雪よりも雨が多いんです。そんなにしょっちゅう雪が積もるようなところではありませんでした。冬はコレクションできるような環境ではないですね。雪が降って積もっているときはソリ遊びに熱中するということが基本でした。それに寒い日が続くような時は、家の中で遊ぶこともできました。大きな家で育ったので、屋根裏とか地下室とか、隠れる場所はたくさんありましたし、遊べる場所はたくさんあったんです。

質問3 質問が2つあります。キュッパの絵本のなかで、最後にはキュッパはコレクションしたものを写真に撮って、コレクション自体は片付けてしまいますね。そうすると、コレクションしたものの感触みたいなものがなくなってしまって少し寂しいなと思うのですが、それはどうお考えですか。また、子供時代に幼稚園の園長先生だったお母さんのおすすめで絵本を読んでいたといわれましたが、どのような本を読まれていたのでしょうか。

ヨンセン 非常に良いご質問ですね。写真にすると、目には見えるわけですよね。ただ、触ることができないので、本当の感触、木の感触だとか、そういった特徴がなくなってしまいます。そうなると、確かに悲しいですね。でも、たとえば私のように家の中にものが溢れ出てしまうくらいいっぱいあると、どうも私が所有しているのではなくて、私が所有されているんじゃないかという錯覚に陥ってしまうことがあります。自分の博物館をつくるという体験を通して、自分のなかでいろいろなものを得たというのは、キュッパにとってもある意味整理して、浄化していくような作業だったのではないでしょうか。彼はコレクションをやっと家の外に出してしまって、またゼロから新しいプロジェクトを始められるのです。写真を撮って記録をつくっていくということは、確かに同じことではないかもしれませんが、博物館があったんだという記憶は永遠にもっていくことができる。わたしも本当にものに魅了されてしまっていて、気がつくと身の回りにいっぱいあるんですけれども、時にものがありすぎて困ってしまいます。ベストな解決策というのはまだ見いだせていません。

絵本でお気に入りだったのは、ピッピですね。『長くつ下のピッピ』が大好きでした。ピッピになったつもりで自分のことをピッピ・オーシルと呼んでいたほどです。本当にピッピの物語が大好きでしたし、イングリッド・ニイマンのイラストも大好きでした。他にも、スウェーデンの本はたくさん読みました。私はやはり、イラストがディテールまで描かれているものが好きでした。長くつ下のピッピなんてまさにそうだったんです。イラストを見ると小さい細かいところまで描かれていて、それが本当にデリケートで素敵だなと思っていました。あとは『ウォーリーを探せ』ですね。あれはやはり子供時代の絵本としてとてもフィジカルで力強いものがあると思ったんです。今みてもこの絵の強さって何だろうと思いますね。子供のときと同じ場所にひきもどされるような強さがあると思います。

質問4 今回の話を聞いていておもしろかったのは、キュッパの成長を感じたことです。最初、キュッパは自然のものを使って博物館をつくろうとしていましたが、最後には、博物館の残りのものを使って人工物をつくって、美術館にしたいと発想していました。ここに、キュッパの新しい扉が開かれたような感触がありました。今まではひたすら分類するだけだったキュッパが、何か表現するということに到達したのかなと、人間の成長みたいな感じを受けたのですが、

今後どういう展開があるのか、もう少し詳しく聞かせてください。

ヨンセン そうですね。私にもどうなるかは分かりません。私も次に何が起こるか全くわからずに、手が勝手に描くんです。この博物館の物語をつくるときも、非常に自然の流れの中でできあがってきました。でも、どの本もやはりプロセスを描いていると思います。私自身も、いつもプロセスに興味をもっています。プロセスというのは、学びの体験です。次の本ではキュッパは学校の楽団に入って、そこで楽譜が読めないという問題に直面します。それをとても悲しむのですが、楽団の中で、いろいろな音を聞いてリズムを感じていきます。そして最後にはお皿洗いをするんです。お皿を洗う作業でも、音を奏でているんじゃないかと気づくんです。家の中にも実はたくさんの楽器があることに気がつきます。スプーンひとつとっても楽器になるし、いろいろなところで音が出る、それが音楽になる、というステップを歩んでいきます。それがプロセスなんです。そして最後には、森の中でコンサートを開きます。いつも学びのプロセスを考えています。ストーリーはただ、時々ふっと思いつくんです。

質問5 先ほどの質問にもつながるのですが、キュッパが芸術作品をつくったあと、今度は美術館をつくろうかなと考えていました。そこで2つ質問があります。科学の博物館と美術の博物館は別物だと思いますか？剥製が好きだとおっしゃっていましたが、アートと科学博物館に展示されているものの間を区別しているのでしょうか？それから、キュッパの2つ目の物語では美術館バージョンというのはあるのでしょうか。

ヨンセン そうですね、区別はしていないと思います。私は研究者タイプではなく、ただ目でものを見ています。絵を描いたり、観察したりすることで学びますが、それはテキストを読んだりすることとは違う学び方だと思います。例えば、ダーウィンは科学者ですが、とても詳細なスケッチを残しています。彼はスケッチをすることでたくさんのことを学びました。かたちを見てたくさんのことに気がつきましたし、そこから進化というアイデアを得たわけです。絵を描くことで、行き着いたんですね。ですから、繋がりはあると思います。ものを観察することから学ぶことがたくさんあるし、3年後に突然「あのときやっていたのはこれなんだ！」と気がついたようなこともあります。科学は、見て分析して、そして書きとってと、決まったことをきっちりとやらなければなりませんが、私はもっとゆっくり、頭のなかでそのプロセスを踏んでいるんだと思います。

美術館をつくる物語ですが、もしその物語が思いつけば書くと思います。私もアートスクールに何年も通いましたので、そのプロセスについてもよくわかっています。楽しそうですよね。何か思いつくかもしれません。物語のほうが私に降りてくるかもしれません。ということで、お楽しみに、とお答えしたいと思います。

質問6 博物館教育系の仕事をしています。キュッパは博物館を最終的にはやめてしまうんですけれど、ヨンセンさんは、他の人がつくった博物館に行く時にはどんな見方をするのかなと気になりました。

ヨンセン 私にとっては、見ることが本当に大切です。ですので、まず歩いてみます。そして写真をたくさん撮ります。私はある意味、流れのあるなかで、ものを見ていくのが好きなんです。そんなに忍耐強い人間ではありませんし、たくさん読むタイプではないのですが、そこで何かひとつでも、目をひくもの、関心をもったものがあれば、自分でもそれについて読んで知りたいと思うかもしれません。帰ったあとに、本を読んでその背景を知るかもしれません。ですが、最初は、とにかく歩いて、しっかり見ることが大事です。

［編集］小山冴子、福井尚子　［編集協力］米津いつか（ノマドプロダクション）　［デザイン］安藤次朗